第 4 章　公開研究会

平成 27 年 2 月 16 日

文科省委託事業「平成 26 年総合的な教師力向上のための調査研究事業」公開研究会

発表者
・講師　大正大学　教職課程　主任　滝沢和彦先生
・講師　東京情報大学　原田恵理子先生

司会
・玉川大学　教師教育リサーチセンター　事務長　高橋正彦

高橋 : 本日はお忙しい中、文科省委託事業「総合的な教師力向上のための調査研究事業」公開研究会にお越しいただきありがとうございました。本日は委託事業の責任者でございます本学の森山。それから大正大学の滝沢先生と東京情報大学の原田先生からお話をいただく機会をもうけさせていただきました。

では、お手元の資料をご確認させていただきたいと思います。この委託事業に関して、本学で小学校 2 種免許を履修している 4 年生 4 名のヒアリングを森山と田子でおこないました。その資料が 1 部。それから小学校 2 種免許を履修している学生に対してのアンケート調査が A4 判で 1 部。それから「芸術学部小学校過程特別履修に関する意識調査」について本学の学生に対してアンケート調査したものが 1 部。以上 3 種類となります。それから参考資料として文科省の委託事業を採択した際の申請書類をご用意させていただきました。本日はこの中の 3 枚目の裏側にある 2 月の「小学校教諭・中学校教諭免許の同時取得に関する公開研究会の開催」ということになります。では、今回委託事業の責任者でございます森山より挨拶させていただきます。

森山 : 先生方本当に今日はお忙しいところありがとうございます。本学の文部科学省調査研究事業の「総合的な教師力向上のための調査研究事業」ということで、今年度採択されました。研究事業の一貫として「総合大学に開設する小学校の免許取得講習の多様な試みに関する比較検証」というテーマで 1 年間研究をすすめてまいりました。特に先生方も承知の通り、今回、中教審におきましても小中一貫校の設置に伴う、いわゆる免許の併有といいますか複数免許で校種にまたがって、つまり、小と中や小・中・高というかたちでの免許の併有についての議論が盛んにおこなわれています。特に先生方の大学でも中・高免の学生を中心に、加えて小学校の２種免許状のいわゆるダブル免許に関する取得ということでの教職課程の運用をなさっておられるということで、本日そのあたりの所を是非お伺いして、わたくしどもも勉強させていただければ有り難

いと思います。玉川大学におきましても、教育学部以外で教職課程を履修している学生に関しましては、昨年度までは通信教育を利用した、ダブル免の小学校免許の取得。そして、今年度から正式に小学校課程特別履修という名称となり、全てが対面式の授業形態で取得するという形になりました。夏期セッション、冬期セッションを中心に長期休暇を利用して学生がダブル免の小学校免許状の取得に励んでいます。これに関してはメリット、デメリットがございます。単純に免許を中高に加えて小学校 2 種免許を取得するということは、単位をとれば免許はとれるわけですが、そこには質というものも重要なキーワードになっていると思います。どのような形で免許を取得させていくか、いわゆる講義なり通信なり授業の形態や履修の方法、履修の時期、また中高の免許にあわせることで小学校の免許をどのようなカリキュラムで履修させていくか、という様々な課題があるわけです。ですから今申し上げたとおり実際には２０数単位とれば小学校 2 種免許はとれるわけですが、我々はそういった中身の様々な問題をしっかりとらえて解決していき、よりよい併有のシステムを構築していく必要があると思っています。

そういう意味では、本日ご出席いただいております、大正大学の滝沢先生、東京情報大学の原田先生に関しましては、実際に中高の免許状取得の学生に加えて、小学校の免許取得についての学内で重要なお立場で実際に学生のプログラムあるいは直接のご指導等にあたられているということで、我々もしっかり勉強させていただきながら今日は有意義な時間をとらせていただきたいと思います。また、先ほど事務長よりお話しがありました通り、本年度の研究会、これまでの研究の資料をとりまとめさせていただきまして、報告書をつくらせていただきたいと思っております。文科省より報告は義務でございますので、この後、着手させていただきたいと思っております。本日の先生方の貴重な講演、そして、そのあとの意見交換も含めて、報告書に掲載させていただければ有り難いです。これが、今後の開放制の中等教育の免許状を出している大学が加えて小学校の免許状を出す過程を履修するという非常に大きなデータになっていると思います。そういう意味で、この後もよろしくお願いいたします。本日の文部科学省の調査研究事業の代表者小原芳明学長でございますが、学長の方からも先生方にくれぐれもよろしくお願いいたしますとのことでしたのでご出席の皆様にお伝えいたします。

高橋：それでは早速でございますが滝沢先生の方からお願いできますでしょうか。

滝沢：滝沢でございますよろしくお願いいたします。いま、森山先生から研究会の趣旨をお話しいただいたところですけども、とてもじゃないですけれども具体的な内容ではありません。先ほど原田先生ともお話ししましたが、このような機会に振り返ることで反省することができ良かったと思います。

本日は、「大正大学における教職課程及び小学校教諭免許状取得の現状について」ということで報告させていただきます。ご存知だと思いますが大正大学は、いわゆる仏教の宗派、真言宗の智山派と豊山派がございます。それから浄土宗と天台宗の 4 つの宗派がございます。日本で唯一の仏教連合大学ということだそうです。大学の名前の由来の大正ですが、大正大学としてスタ

ートしましたのが大正 15 年です。もちろん僧侶の養成ということで始まったのですが、その時から、今でいう専攻科ですかね、それがありまして、中等教育の養成というのは戦前からしていた、ということだそうです。戦後になりまして新生大学としてスタートしましたが、教員養成の仕事はずっとやってきておりまして、そろそろ定年をむかえる校長先生方から、「最近、うちのほうに（大正大の卒業生が）来ないじゃないか」など言われたりもしております。

1.大正大学における教職課程の現状

（1）学部学科の構成と取得可能免許状

今日は数字を出してお話しさせていただきますが、とても忸怩たる思いで数字を出してお話をいたします。まったくの文系の学部なのですが、学部学科の構成と取得可能免許状ということで整理しておきました。現在は 4 学部体制です。仏教学部仏教学科がございまして、ここで中学社会、高校公民と宗教が取得できます。それから人間学部。近年改組を繰り返しておりまして、いろいろ学科が変更しておりますが、まずは社会福祉学科、以前は高校福祉で出しておりましたけども数年前この課程は返上いたしました。そして臨床心理は高校の公民だけ取れます。人間科学科は心理学と社会学が中心の学科です。ここでは中学社会と高校公民が取れます。実は私も最初は人間科学科に所属しておりましたけれども、平成 20 年にそこから新設の教育人間学科へ移りました。独立したということになるのでしょうか、当初は、文学部哲学・宗教学の講座も一緒に移ってきまして、どのような学科の性格にするのかといった時に、教職課程の教員として教育人間学科に移ったわけですが、もう少し教育で特色が出せないか、という話を当時いたしました。特に哲学・宗教学、昔からの大学でこういった哲学や宗教学の研究と教育の実績がございます。そういったところで第一次安倍内閣の頃でもありまして、「こころの教育」「いのちの教育」などで特色が出せないか、ということで教育人間学専攻を人間科学科の中に作ったのが平成 20 年のことです。その時には中学社会と地歴・公民さらに宗教と、専攻の定員の割には欲張って免許状をとれるようにしました。その 2 年後に学科内の専攻から学科へと独立して今日に至っているということです。以上が人間学部です。

それから文学部ですが、こちらは人文学科の中に日本語日本文学コースというのがありまして、中高国語が取れます。また、人文学部の中に哲学宗教学コースというものがありまして、これは一度、人間学部の方に来ましたが 2 年後に文学部の方へ戻ってしまいまして、こちらでは、公民と宗教が取れます。それからカルチュラルスタディーズコース、これは、英文学の先生などが所属されているのですが、取得免許はなしということになります。あと歴史学科がございまして、日本史と西洋史と東洋史のコースで社会、地歴が取得できます。

それから表現学部というものが数年前にできました。この中に英語表現・コミュニケ―ションコースというものがありまして中高英語、それからクリエイティブライティングコース、こちらは書道の先生が所属しておりまして書道の免許が取得可能でございます。

それ以外のコースもございますが、学科としての免許取得はございません。ただ、いわゆる他学科聴講を可能にしておりまして、学科をまたいで単位をとることで社会や国語の免許を取得す

る学生も数名ですがいます。

（2）免許状取得の状況

私が大正大学に参りましたのは平成 15 年（2003 年）です。そのころは、大学全体で 800 名ぐらいの定員でした。今は 1000 名少々なのですけども。当時は教員養成を希望する学生が 200 名ちょっとでした。120 名から 130 名くらいは教育実習に行っておりました。ここ数年は減ってまいりまして、入学当初希望（教職を）する学生が 150 名前後です。教職課程の科目自体は 2 年生からなのですが、最初のガイダンスに来て取り始めるのは 110 名程で、実際教育実習へいく学生は 770 名前後です。それで、今年度免許状取得の状況ということで今年度（平成 26 年度）、教育実習へ行った学生は少な目で 65 名でした。

まず仏教学科からですが、仏教学科は、定員 100 名程ですけども 8 名です。皆さんお坊さんのお子さんで将来は自分のお寺の幼稚園の先生をやるかと思います。とった免許の種類ですが社会が 7 名、公民が 7 名、宗教が 5 名、それから他学科聴講で取ったということで地歴が 2 名です。それから人間学部ですが、福祉・人間環境はなしで、臨床は 1 名だけ公民で免許を取りました。ちなみにこの学生は北海道の私立大学の大学院に進学します。それから人間科学科 1 名、彼は高校の公民の免許だけ取りましたけれども、卓球のスポーツ推薦できていて栃木県の私立の母校で専任教員になることになっています。それから私が担当している教育人間学科ですが、25 名免許状をとる予定です。実際入ってくるのが 75 名くらいですが最初は教職課程希望が 30 数名で、半分は教職課程をとろうと思っていたのですが途中で辞退というか挫折ということになりました。免許状の種類ですが社会が 24 名、地歴が 22 名、公民が 23 名、と学生のほとんどが地歴公民と両方取得しております。それから宗教、先ほど言いました「いのちの教育」ということでこういった科目がありまして、宗教で免許状を取得したいという学生が毎年おります。それから他学科聴講で国語が 2 名。それから資料の方は、太字にしておきましたが小学校の方で 5 名です。この 5 名ですが、全員小学校の採用試験を受けてはいます。一次は通ったのですが、残念ながら二次で不合格となっております。

それから文学部です。日本語日本文学コースで履修者 8 名ですが、中高国語で 8 名、さらにそのうち 2 名が小学校免許をこの春、取得予定です。ちなみにその小学校を履修したうち一人が、長崎県の中高一貫校で国語の常勤講師が決まっています。それから哲学・宗教コースで 1 名履修して公民だけの免許状を取得予定です。そしてカルチュラルスタディーズコースが 0 名です。歴史学科が 16 名履修です。以前は歴史学科の学生の方が教職課程を履修する人数は多かったのですが、最近は教育人間学科の方が多くなってきました。中学の社会 15 名、地歴 16 名、他学科聴講で公民を取得したものが 1 名ということです。地方の高校で地歴の専任で合格した学生がおります。それから表現学部は、中高の英語で 2 名です。中学校の一次は受かったのですが残念ながら二次でだめでした。それからクリエイティブライティングで 2 名、1 名が書道、1 名が国語を他学科聴講で取りました。それから、専修免許状、大学院で取得した学生が 2 名で比較文学専攻の学生は神奈川県で英語の専任に決まりました。あと、科目等履修生は昨年春の卒

業生で、昨年度教育実習に行けずに今年度卒業をしたということで、社会と宗教です。以上のような状況です。公立の採用試験一次を通過した学生は全部で１２名でした。そのうち 8 名が私の担当の学科の教育です、あとは大学院、それから文学部といったところです。

2、小学校免許状取得のための通信課程受講者

小学校免許状取得のための通信課程受講者の免許取得状況です。淑徳大学さんの通信教育課程の元で通信課程を始めましたのが平成 22 年度のことでした。こちらに関しましては、数字的には非常に反省しなければならないところです。平成 22 年度に募集をしましたところ 4 年生で 2 名希望がありました。もちろん 1 年間では取得できませんので 2 名とも卒業後、もう 1 年間かけて免許状を取得いたしました。人間科学科と歴史学科の学生です。もちろん中高の免許状も取得の上なのですが卒業 1 年後に免許状を取得しました。1 名は卒業後に大正大学の事務職員となり一年後に取得しました。もう 1 名は学校の支援員をしながら 2 年ほどかかりましたが千葉県の小学校教諭になりました。それから 3 年生は 5 名希望して参りましたが、そのうち 1 名だけ取得で、その他は卒業までに辞退することになりました。それから 2 年生で 3 名ほど希望があったのですが、途中で教職科目単位未修得のため全員辞退しました。

それから 2 年目ですが、新 2 年生と新 3 年生に募集をかけまして、実際募集をかけましたのは、1 年と 2 年の終わりの 1 月です。新 3 年生は 8 名でうち 4 名が取得、2 年生は 10 名希望があり取得したのは 2 名ということで、非常に厳しい数字が並んでおります。その 3 年生で残った 4 人のうち 1 人が千葉で小学校専任、3 人が都内及び千葉で講師をやっています。そのうち 2 人はこの春から専任です。

それから平成 24 年度も淑徳大学さんでの通信です。こちらも 4 年生になってから希望してきた学生がおりました。5 名中 4 名が取得しました。それから当時 3 年生だった学生からの希望は 3 名ありましてそのうち 2 名が取得しました。3 名のうち 1 名は結局、小学校の免許が取得できなかったのですが、昨年卒業しまして在学期間から小学校の特別支援のボランティア活動をおこなっていましたが、卒業後も板橋区の中学校の車椅子の生徒の介助員をそのまま続け、今年、東京の社会地歴で合格しました。他の 2 名は今年も講師を続けています。

続いて、平成 24 年度 2 年生、今年の春の卒業生になります。8 名のうち 5 名が免許取得見込みです。そして、平成 25 年度は淑徳大学さんの方が、教育学部をつくるということで通信の募集が停止になりまして、明星大学さんと交渉しまして通信を使わせていただくことになりました。最大（通信の定員）10 名ということになりました。3 年生が 2 人希望で、この春、2 人とも免許取得予定です。そのうち 1 名は採用選考 1 次合格でした。2 年生が 8 人希望でしたが、2 年生から 3 年生になるときにそのうち 2 名が教職単位の履修を誤り、教職課程辞退ということになりました。だんだん履修が厳しいということが伝わってきまして希望が減ってきました。平成 26 年度ですが 3 年生 2 名、2 年生 2 名で、がんばっております。ついこのないだ平成 27 年度春からの募集をかけまして、応募してきたのが全員で 7 名。こちらで面談をしまして、成績、これまでの学習つまり大学の単位だけではなくボランティアへ行っているだとかなどのヒアリン

グをします。去年もここで 8 名の希望がありこの面談で半分落とし 4 名にしました。今年の場合は 7 名のうち 1 名落としました。GPA は良いのですが考え方に引っかかるとこがありまして落としました。

これまで平成 26 年度卒業生までで、ガイダンスなどの出席を含めまして 46 名の希望がありました。卒業時に希望者の半数の 22 名が小学校免許の取得ができました。そのうち専任、講師を含めて現在 13 名が小学校の教壇に立っております。ということで決して自慢のできる数字ではございませんで、この数字を確認して反省しているところでございます。

3、小学校免許状取得者の声から

現在小学校の教員として、教壇に立っている卒業生数名にメールで話を聞きました。今日の会の趣旨に合っているかどうか分かりませんが下記ご覧いただければと思います。いわゆる一般学部と私のところの教育人間学科を分けた方がよいかと思いました。今まで免許を出している学部は、文学部の人文学科の国語と歴史学科です。

（1）いわゆる一般学部（文学部人文学科、歴史学科）卒業生の場合

（A さんの場合）

＊２年生から学校支援のボランティアを行っていた。

＊卒論は「玉葉について」

＊歴史学科卒業、現在品川区の講師

●「歴史は６年生の社会科では強みになると思います。指導書や資料集に載っていない知識を蓄えることができたので。」

（B さんの場合）

＊歴史学科卒業、現在千葉県教諭、２年生担任

＊大正大学の隣の中学校で３年生の時から学校支援のボランティア

＊子どもとの接し方が上手。一緒にボランティア指導していた学生が自信を失くして悩んでしまい教職課程を辞めてしまった。

＊本人の感想から教員養成学部と違った（良い）感覚を持ってくれている

●「参考になるかは、わからないのですが…歴史文化学科で史料を読み取った経験があったおかげで国語の漢文だったり、古文だったりを教えるのに少し役立っているかなと思います。

小学校は全教科の指導で、さまざまな方向からのアプローチが必要になります。私もまだまだ柔軟にこなすことができず、日々勉強しながら子ども達と過ごしていますが、この仕事は何よりも人との関わり合いがあってのことなので、いろんな人を見る力がついたかなぁと思います。」

（C さんの場合）

＊人文学科卒業　現在東京都北区立小学校教諭　５年生担任

＊北区の小学校でボランティアを続けていて、その学校に採用された。

＊小学校１種を取得

＊北区は小中連携が強く、各小学校にファミリーの中学校があり小中交流の授業研究が盛んに行われている

●教科面での強み（日本語日本文学コースとして）・・・直接的な強みはありませんが、間接的に役に立つという感じです。

・「古典に親しもう」という単元が小学校でも導入された。
古典のリズムを楽しみ、親しみを持つ程度の指導に留まるが、豆知識や読み方、古文の意味などが分かると児童の関心にはつながる。

・物語中に出てくる昔の言葉（おたまじゃくし＝おたま）の語源などを勉強していたため、辞書調べの指導などがしやすい。

・「図書の時間」を国語の時間内に確保しなくてはならない。読書指導やおすすめの本の紹介はしやすい。

●免許をとりやすく（免許を取得する際困ったこと）

・提携大学で取得する場合、事務的処理に２倍の時間がかかる。

・大正大学と淑徳大学の講義や説明会が重なってしまうと、大正大学側を優先しないといけないが、淑徳大学のスクーリングは限られた期間でしか実施されていないため、なかなかスケジュールを立てることができない。

・大正大学の単位を一部使えたが、教育相談等重複して単位を取らなくてはならない。

●とくに小中一貫教育に関わって

・小学校での教育活動（授業内容）が中学校の授業では活かされない。

Ex）・グラフの読み取りや絵、写真の読み取りをする機会はほとんどない。（暗記型）

・発表や討論なども少なくなる。

（コミュニケーション能力の育成といいつつ、前に出てぼそぼそとノートを読ませるだけ）

・社会科では、各国の国旗と位置も覚えさせて欲しいといわれるが、指導要領には小学校で教えることにはなっていない。

⇒中、高の免許を持っていることは、小学校の現場では直接的には活かされないかもしれないが、中学校の教員が小学校でどのような学習をしてくるのかを把握しておくことは大切だと思う。

⇒小学校でも、中学校ではどのような内容の授業をするのかを調べてから単元指導にあたるように言われている。

・音楽や美術などの技術的なものは、一貫性があるていど確保されている気がする。

・理系科目は、一つずつ確認しながら進めている。
しかし、実験計画などは教委からトップダウン。

・文系科目は、プリント学習などで、小学校でやってきたことを更に深めた暗記科目に変わってしまっている気がする。

（2）教育人間学科卒業の場合

（D さんの場合）

＊卒業して２年

＊教育人間学科卒業　現在千葉県教諭　２年生担任

＊滝沢先生のゼミ生

●「私の場合、まだ低学年しかもっていないので、社会科の授業がない分教科指導の面は何とも言えないです。生徒指導に関しては、大正大学での教育心理学や特別支援教育についての講義は指導に活かされています。先生がおっしゃっているような、ダブルスクールの形での強みは、正直、免許取得をスムーズに行うことができたという利点だけのように感じます…。すみません。あくまで「私は」という意見ですが、まだ低学年しか担任していないことが大きく、生徒指導の面では年齢が幼く、教科指導の面では該当教科がなく、大正大学で学んだそれらについての知識はまだ現場では直接的には活かせていません。ただ、もちろん教職員としての誇りや自覚といった根本的な部分は、常々身にしみて感じております。」

（E さんの場合）

＊卒業して２年

＊教育人間学科卒業　現在千葉県で小学校講師（４月から小学校教諭）

●「強みとしては、自分の持っている免許の教科（社会）においては、中学校の学習への系統を考えて教科指導が出来ることだと思います。小学校の、その学年でぶつ切りの学習にするのではなく、『この単元は中学校のこの単元にこう生きるというのがわかっているから、教科指導の方法は表を見せるじゃなくて表を作るにしよう』や、『教科書に載ってないけれど、この出来事の背景には何があったのか予想させよう』なと、指導を変えています。

中高の免許が無いと、また中学校での TA 経験が無いと、こういう教科指導はできないと思うので、中高の免許が主の一般大卒の良い所（小学校での指導に活きている）だと思います。」

【教育人間学科卒業生の卒論の論題（参考までに）】

「生徒児童が自ら考える道徳授業の実践－小中学校における実践例の研究を踏まえて」

「TA の活動において学生は何を学ぶのかービデオ記録の分析を通してー」

「小中学校における伝統・文化教育の課題」

「授業を改善するとはどういうことかー教育実習における教壇実習から考える」

「教育連携事業におけるティーチングアシスタントの実践力向上を支援する教材の作成」

「実習授業をどう改善するかーTOSS から学ぶ授業づくり」

「子どもの暴力に教師はどう対応すべきかー中学生の校内暴力への対応ー」

「Twitter を利用した自己表現と対面的自己表現の違い」
「学校教育における部活動の意義－これからの部活指導の在り方」
「地域教材の可能性を考える－富士山をどう教材化するか－」
「高校での部活動参加がライフスキルの獲得に与える影響－部活動の特徴に注目して－」
「日本の伝統的は食文化を扱う授業づくり」
「自閉症スペクトラム児の現状と課題－学校と家族はどう関わるべきか－」

論文の内容をいくつかご紹介させていただきますと「TA の活動において学生は何を学ぶのか－ビデオ記録の分析を通して－」では、台東区の小学校で学校支援を TA として行っていた学生が、自分が TA をする中で何ができるかということに問題意識を持ちまして研究が始まりました。彼女が TA として教室に入っているところを私が撮影して、二人で分析して、その後、2 か月後に再撮影して比較するという卒論を作成しました。明らかに、彼女の子どもへの気づきが多くなり歴然と変わっていくことが見られました。また、「授業を改善するとはどういうことか－教育実習における教壇実習から考える」では、ひたすら指導案を徹底的に書くということを続けました。これらは、いわゆる教科専門の卒論ではなく、かなり授業を意識した卒論なので教員養成としても適しているのではないかと思います。

ここまでの卒業生のインタビューを聞きまして、暫定的ではございますが、今回これを考えるうえで 11 月に教員養成部会が報告を出していますのでそちらから引用させていただきます。

4、暫定的結論

（1）教員養成部会の論点

「これからの学校教育の担う教員の在り方について（報告）
－小中一貫教育制度に対応した教員免許制度改革－」

●教員採用における課題

「教育に対するニーズが複雑化・多様化する中、豊かな知識と識見はもとより、幅広い視野を持った個性豊かでたくましい人材を教員として確保することが必要である。また、一層多様化している児童生徒の興味・関心に対応するため、教科や指導法の一部についてより高い専門性を持った人材の確保も必要となっている。さらに、採用における当事者間のミスマッチを未然に防ぐため、採用前において学校現場を体験する機会を増やすなど、互いのニーズを符号させる工夫も必要である。」

●小中両免許状の併有の促進

「今後、小中一貫教育や小中連携教育の取組がより一層広まっていくことが考えられ、小中一貫教育学校（仮称）以外の学校の教員も 9 年間を見通した中での教育を推進していくことは重要

である。（中略）また、教員個人にとっても、異なる学校種での経験は自らの視野を広げるとともに、知識・技能の向上に資するという観点から、両免許状の併有を促進することは有意義であると考えられる。」

⇒

「例えば指導力に優れた教員や教科に関する専門性の高い教員、小中連携教育や小中一貫教育に関する経験の豊富な教員など多様な教員の配置が進み、これらの教員が学校内において幅広く活動できるようになることが期待される。」

⇒

「小学校における専科指導を充実できる」

「小学校教員等が、中学校や小中一貫教育学校（仮称）の中学校課程においてティーム・ティーチングの活用などにより中学校教員等とともに指導を行なえるような体制を構築することも重要である。」

⇒

「さらに、大学の教職課程の内容の見直しを検討する中で、例えば学校種別ごとに修得が求められている教職科目等の統合、小・中学校全体を俯瞰した児童生徒の発達段階や教育問題に係る指導の充実などについても検討を進めていくことが重要である。」

こういったことがこの教員養成部会の報告でありまして、本日のテーマに関わって非常に大事な論点だろうというように思いました。これが一つ目です。

（2）大正大学における TA 制度

二つ目は、私が大正大学に来てから 3 年目の平成 17 年度より TA 制度を始めました。TA とは「ティーチングアシスタント」とのことです大学に隣接する豊島区立巣鴨北中学校の当時の校長先生が数学の少人数クラスを始めた先生でした。この年に校長先生と連絡を取り合って、中学校の数学の授業のアシスタントを学生にということが実現しました。翌年度からは小学校にもお願いしまして、多いときに半期で 100 名ぐらいの学生が TA を行っておりました。最近は、春学期ですと約 70 名前後の学生が支援に行っています。平成 20 年度に人間科学教育人間学専攻を新設しまして、TA 活動を「教育の現場を知る」と科目で単位化しました。本年度教育人間学科 1 年に 70 数名が在籍していますが、そのうち 40 名ほどが TA を経験しています。こういった活動を含め、大学では COC（センターオブコミニュティ）「大学と地域の連携」という文科省の取り組みに応募していました。2 年連続落ちてしまっていますが、その中に、大学と豊島区の課題ということで、生活（福祉）課題、教育課題、振興（町おこし）課題、ということで 3 つの課題を行なおうということで、私どもの学科では、「教育課題」の連携事業として取り組んでいます。小学校課程の受講者のほとんどが TA を経験しています。先ほど申した女子学生のように、TA 先で現役採用されたということもあります。

（3）卒業生の声をどう受け止めるか

教員養成部会の報告と私どもの経験と卒業生の意見をどのようにまとめようかと思いましたが、次のように卒業生の声を受け止めてみました。

●大学（一般学部）での専門

先ほどの教員養成部会の報告にもありましたように、小学校課程だけでは不十分かもしれない高い専門的な力量、知識を持つことができる。しかし、卒業生に聞いてみますと、なかなか専門性と言いましても、例えば「私は、日本史を専門でやりました。」と言っても歴史の全体が詳しいということは無くて「自分は江戸時代のこれこれをやりました」ということになってしまいます。ただ、先ほども言いましたように、一部の所について詳しいということは子どもの興味関心を引き出す上で良い話でもあります。「卒論で扱った」などの特定の分野については得意ということで、教科全体についてのところにはどうなのだ、と疑問もありますが。それは、もちろん大学の学科、教職課程での一般的包括的な科目の在り方も絡むのですが、本来ですと大学として教員を養成しているのだということから言いますと、何年もこれは答申でも批判されているところなのです。ただ、なかなか歴史学科の先生方に、そこそこにやってとお願いするということは難しく悩ましいところです。それから 3 つ目は先ほどもありました、中学校の免許を取得のために中学校あるいは高校で教育実習をしてから小学校で実習することで、小中一貫で見ることが可能になっています。小学校教員として中学校の教育へ注文をもてるようになってきていると、それも非常に重要なことだと思います。

それから、歴史学科の学生が教員志望者以外の学生との交流ができているということでこれもいろいろな人と付き合うといことで大事かなと思います。

●大学（教育学系）での専門

教育心理学、特別支援教育、教師としての心構えや TA の経験などで現場のことを意識してできたかと思います。ただ、社会、国語の地歴や公民の免許を取ったからと言って、教科全体の専門性ということではやはり弱いところがあります。ただ、一般学部で取得した学生と同様に、中学校や高校の免許を取得のために中学校、高校で教育実習をしたことで、小学校でも中学校での課程を意識して授業をすることができたということで、これも大変良いことだと思います。

●学生の負担

辞退の数字が多かったということですが、学生のいろいろな面での負担です。もちろん「大学としての指導体制」にも関わってきますし、安易に受講させた私どもの責任もあるのですが、その一方で、通常の卒業単位に小学校の単位とそれに加えて TA が単位に（あるいは活動として）入っていますので、どっちつかずになってしまって非常に負担になり、本来取得するべき中学校の免許取得も出来なかった、という話もあります。よくも悪くも、採用選考を

受かるためにはTAが必修のような意識が出来上がってしまっています。こういったところで学生の負担が非常に大きくなっている、という現実があります。
また、近年、TA先の現職の校長先生が個別指導（論文・面接・集団面接）を非常に熱心に取り組んでいただけるということが増えております。あるいはその学校の校内研修にTAの学生を参加させていただけるとか、TAの学生を通して私たち大学の指導教員も校内研修の受講者として参加させていただくということも結構増えてきています。

●大学としての指導体制

森山先生の最初のご紹介からは、学生（小学校免許取得）に対しても指導をしているという紹介をいただいてしまっていましたが、実際は、小学校免許に関しては、ほぼ丸投げになってしまっていました。レポート提出に関してもこちらで確認するということはありませんで、通信の学生に対してサポートができないことが一番の反省になってしまいました。

今日、このような機会に見直し反省できましたので、今後ともご指導いただきながらやっていきたいと思います。どうかよろしくお願いいたします。

高橋：滝沢先生ありがとうございました。では、続いて、原田先生、お願いします。

原田：よろしくお願いします。いま滝沢先生から発表をいただきましたが、私も今までどんな指導をしたのかな、学生をどのように支えてきたのかなと振り返りながら、本学と重なりあうところと、逆に本学ならではのところもあるのだと思いました。今回は特に小免についてお話しようかと思いますが、特に本学の中では受講者が少ないということもあるせいか、学生に対して非常に細やかに関わって指導しておりますので、その点を中心に発表させていただきたいと思います。

1 本学教職課程の体制

まず、本学は総合情報学部というところで 124 単位卒業単位をとって、教職課程ということで 69 単位とるというかたちになります。小学校免許を取得する場合はそれに 20 単位プラスしてとるということで相当数、負担が大きいということになります。教職課程の教員が 4 名おります。特免教授といわれる方が 3 名、専任というわれるかたちで私が（1 名）計 4 名います。ですので、特に今回のこの養成特別プログラムの通信については、私の方で指導するということで共通認識になっております。

本学は学生のレベルということになりますと恥ずかしくて非常に優秀とは言い難く、小学校から高校までの学生時代に挫折感を味わうとか、あるいは学習に関しては、得意な分野が特別に良いということがあることはありませんので、伸び白などに期待して 4 年間教育するということが本学の教員の中で共通した取組のベースとなっています。合言葉として「30 歳までに教員になろう」「30 歳になるまでにしっかりと教育を知ろう」ということで伸びしろ幅に期待をするということが重視されています。ということで 4 年間の中では、学生の伸びしろ幅に期待をして、

学生には負担は与えるだろうけれどもスキルの向上を目指すために専門性だけではなく人間的な教育もしていこうというところがあります。

そういうところから、本学には今年から「通過審査」というものを設けております。本学の場合は、前期からすでに教職課程の科目を履修させています。「教育学概論」、そして今期に森山先生にもご担当していただいている「教職課程編成論」こちらの方が入ってきております。

1 年生の通過審査の一つ目として 1 年生の段階で作文を書くということで、モチベーションを維持するために「自分が学んで来たことを振り返ろう」ということ「今後教職を学ぶにあたって自分は何が足りないのか」ということの作文課題が入ってきております。それから二つ目として、前期後期で受講した教職科目を試験というかたちでペーパーテストを実施しております。今回も森山先生に試験内容としてどういうかたちがよろしいでしょうかということを事前に確認させていただいております。

2 年生は通過審査としては IT パスポートの取得があります。本学は 1 年生、2 年生は情報しか免許が取れないということがありますので、「情報のプロパになろう」とういことで IT パスポートは最低限とりなさいというかたちで 3 年生の 3 月までに取得しないと教育実習に出さないということをうたっております。そして、同時に道徳の模擬授業というのを行っております。これは、道徳授業論というのが 2 年生の後期にありますので、千葉県の教員採用試験 2 次と同じで 7 分間というのを実際に模擬授業させています。これは中身を問うというよりは、どちらかというと「人前で発表できるか」とか「緊張や不安があるのだけど堂々とできるのか」とかそういったことを見ていくというかたちをとっています。そして、同時に 2 年生まででとっている教職科目の試験をペーパーでするということで、千葉県の過去 3 年間の過去問（採用試験の）を中心に問題を出すということになります。

3 年生になりますと専門科目の主免となります。主免の模擬授業を 50 分ということをおこなっています。一応、この通過審査を通過しないと教育実習には出さないということになっております。

1 年生、2 年生、3 年生、全員が通過審査を受けることを通して、やはり、その学年に対応した力がついてないと思う場合には、3 月の最終週に補講するということになっています。つまり、学生の方には（通過審査は）教育実習に行かせないようにして、教職課程を落とすための試験ではなくて、あくまでも該当学年時の上がるべき力（進級するべき力）がついているかどうかを確認するためのものであるから、それが保障されてない場合には補講をしますということで 3 月の最終週の月曜日からおこないます。例えば、模擬授業であれば、毎日、模擬授業の補講をおこなうということになっています。

このために、どういった課程の年間の教育体系を組んでいるかというと、1 年生の段階からすでに前期授業が始まっていますが、4 月にしっかりガイダンスをおこなって、教職課程に対する履修の取り方や手続きの説明をしています。同時に 7 月の段階で前期の授業がありますので、4 名（教員）いますので、4 名でそれぞれ担当学年を決めて、面接を全員とおこなっております。私が専任ということで 3 年を担当するようになっています。なぜ 3 年生を専任がやるかという

のは、3 年生のこの時期に、教員志望者をふるいにかけて一貫した指導をおこない始めるからです。ここから教員になりたいという学生は、教員採用試験にむけて、ないしは、教員になるための資質向上ということで一本釣りというかたちで個別にかなりアプローチをかけていきます。それ以外のところで、特任教授の先生方には 1 年生、2 年生、4 年生をそれぞれ担当していただき 6 月、7 月には個人面接が終了するというかたちをとっています。

以降、本学で特徴立てていることが、1 年生の 11 月に小学校の参観に行っております。特にこの小学校（千城台北小学校）は、全国に珍しい単級に対して特別支援学校が 8 クラスあるという学校です。ということで特別支援の様子も丁寧に参観できるということも分かりますし、実はここは半分の先生が若手教員と言われる先生でいらっしゃいますので、だからこちらに参観に行かせていただいているということもあります。

そして、2 年目になりますと、特別支援学校の病弱学級に参観に行きます。これは、何がねらいかといいますと、病弱学級でありますので情報教育に非常に長けている学校でありますので、情報学を本学が専門としておりますので、どういった情報教育をしているかということを勉強します。これは、教科に関わらず勉強になりますので、それを見るということが一つのねらいになります。病弱のネフローゼとかあるいは白血病だという子どもたちが、これまでは学校に復帰する子が少なかったのですが、治療が良くなったということから、学校に戻るという子ども達が増えています。それと、発達障害の子が入っているというところで、先生方がどのように取り組んでいるのか、しかも、幼稚園から高等学校までありますので、職業教育まで含めたということを見ようということで、そういったねらいのところで参観をさせていただいています。ちょうどその頃、介護体験ということで、特別支援学校の参観がありますので、非常に勉強になるようです。

その上で、中学校の方に情報の授業を参観に行かせてもらっています。これは、技術の時間にやっておりますので、情報の免許を取得する学生からすると中学校でどのような授業をやっているのかということで、非常につながりのある場面になっているようです。

そして、それ以外にも発達ということで授業校内を見させていただきますので、中高というところの「移行」というところも含めて、校長ないし担当していただく先生方に講話をいただきますので、「移行教育」というところでも、非常に勉強になるということになります。

3 年生になりますと高校の授業を見に行かせていただきます。ここで、情報の授業を持っている学生が実際に授業をさせていただきます。6 回から年によっては多い時で１０回ぐらい事前に高校の先生が大学へ来てくださって、指導案の指導をしていただき、実際に授業をするところまでつなげてくださいます。

ということで、教育実習へ行くまえのリハーサルを兼ねることが、特に情報の学生はできるというかたちなっています。今年は二進法のところをやりました。そうすると、3 年生は、教育実習に行く前の同期の学生が実際に教壇に立っているところを見ることで、自分自身に置き換えて、自分に足らないところはどこか、学生を通して、自分がそこに置かれたら何をするべきであるかなどを実際に考えさせられる所があるということで、非常に効果的な授業参観、模擬授業になっていると思います。

ということで、本学として特性的にやっていることが小学校、中学校、高等学校、特別支援学校にも授業参観をするということをやっているということです。それから、特に2年生の 5 月に「高校 SSV」というかたちで、千葉県の教育推進校へ学習支援へ行きます。「高校 SSV」とは中学校で一部授業の取りこぼしがあった生徒さんを高校 1 年生で保障するという推進校に、サポートボランティアというかたちで入る取り組みです。

つまり就学の保障をする勉強をしている学校に対して、学生がボランティアで入るということを 2 年生が全員入るかたちをとっています。ですので、すでに 1 年生ないし 2 年生で小学校、中学校高校を観る、あるいはボランティアに入る。以降、3 年生、4 年生でも教育実習に向けてというところで、繋がりを持った教育体系をしていこうというかたちで、本学としては、全校種を見せるということをやっています。

そのため、非常に小学校の教員になりたいとか、自分の取得していない特別支援の教員になりたいとかという学生がいます。ですので、卒業後に自らお金を払って、通信でとか、学び直しをしてとか、あるいは臨任でとかといった採用があるという学生が非常に多いという実態があるということをご理解いただければと思います。

2　取得可能免許に関して

現 3 年生、4 年生までは旧学科というかたちになります。4 学科あります。総合情報学部の下に環境情報学科・情報システム学科がり、中学校数学と高校情報、数学が取得できる。情報ビジネス学科では、中学校社会、高校情報、商業、公民が取得できる。情報文化学科では、中学校社会、高校情報、公民が取得できます。そして、平成 25 年度以降に入学した、1 年生、2 年生は総合情報学科で高校の情報しか取得できないということになっています。ですから、今回発表させていただきます。小学校教員養成プログラム玉川大学様と契約させていただいているところでいうと旧学科の 3 年生、4 年生が対象になるということになります。

3　在学生と進路（3 年間）〈平成 27 年 2 月現在〉

今年度（平成 26 年度）は 13 名が取得見込みです。毎年 1 年生の段階で 50 名程度希望があります。ところが 1 年生で厳しい個人面接で指導していきますので、大体 10 名から 15 名くらい落ちていきます。そして、2 年生でやはり 10 名くらい落ちていくということで、大体毎年 20 名前後が残っていくということになっています。

ただ今年度に関しては、情報系企業が非常に就職の採用が良いということがありまして、2 年生や 3 年生の段階で、すでに「教職はいいです」ということが多かったです。ということで教員希望者が近年稀にみないくらい非常に少なかった年になります。そういった中で、5 名の者が教員を希望していまして、うち 2 名が大学院進学を希望者、そして、成田市になりますが補欠合格で、ただいま採用を待っている状況です。それから非常勤講師採用待ち 2 名というかたちになっています。昨年度は 18 名の免許取得者のうち 7 名が専任ないし非常勤で教員になっています。

本学の特徴というのは、卒業生が非常勤講師を経てから正式採用されるということが毎年 2、3 名いるという傾向があります。去年のことを言いますと、埼玉県、千葉県で、あるいは私立で 5 名採用となっています。その前の年（平成 24 年度）になりますと 22 名中、9 名が教員を希望して、全員、非常勤や専任を含めて教員になっているということになります。本学は 20 名ぐらい希望するうち半数、あるいは教員免許をとったうちの半数が教員養成をしてほぼ全員が非常勤ないし、専任になるというかたちで進路を決めているというかたちになっています。

4　小学校教員養成特別プログラム受講者数

（1）受講者数

小学校教員養成特別プログラムというのが平成 23 年からスタートしております。平成 24 年に卒業ということです。平成 23 年度受講者は 2 名おりまして、1 名は離脱して、1 名はまだ継続中です。この卒業生については、現在成田市の中学校で採用になっています。本人に話を聞くと、残り 1 科目ですが業務が多いということで、なかなか勉強が追い付かないという状況だそうです。あと 1 科目なのでやれるのではないかと思うのですが、やはり、なかなか余裕がないということが現実の状況のようです。

それから、平成 24 年度からスタートした学生は 4 名いました。うち 2 名が終了して、うち 2 名が離脱しました。離脱した者については、やはり、本学の免許との兼ね合いのところがなかなかうまくいかないということで、途中で離脱したということになります。取得をした 2 名については、在学中に取得して、横浜市の教員に採用されております。もう 1 名は卒業と同時に成田市の中学校に採用になりまして、採用された段階で勉強して取得しまして、今年千葉県の小学校に専任で採用になりました。

平成 25 年度は希望が 0 だったので、平成 25 年卒業生も 0 ということになります。今年度 26 年度からスタートした学生が 1 名いるということになります。

（2）受講者の基準

成績を GPA2.0 以上としています。この数字は低いのですが、本学の学生の伸びしろ幅に期待したいということで、面接の中で特に「意欲」「動機づけ」で高い者をとっていきます。そして計画表も出させています。どのように計画性をもって受講していくかということをみています。そのうえで受講をさせています。それでも本学は中高の教員の希望が少ない中でも多い中で、情報を希望すると非常勤で 100％就職できます。数学の情報に関しましては、場所が場所なだけに、競争校がないため、ほぼ希望すれば就職できるということを学生たちも先輩たちから聞いておりますので、そんなに無理して小学校免許をとらなくてもという所を正直もっています。実は、玉川の募集をかけた後に個別で面接をして、「君は可能性としては小学校の免許をとったらいいのではないか」という声かけをたくさんしているのですが今の 4 年生はゼロだったということなのです。そして、いまの 3 年生も声をかけて「1 年間頑張ってみよう」ということでやっと受講者がいたということです。

やはり、情報や数学の非常勤が 100%だということがありますので、あまり基準を厳しくもうけてしまうと、やる気がそこから落ちてしまうということで、幅をひろげるということで、その基準になっているという背景があります。

（3）本学教職課程におけるプログラム受講者への教育体制

①受講が決まってからのガイダンス（面接）

本学の場合は、本学でも免許をとっている 124 単位にプラスをして、小学校の免許取得になりますので、サポートしないと、とてもでないですが取得できないというのが正直なところです。

そこで、本学教職課程におけるプログラム受講者への教育体制というのをがっちりしています。そんなところで、私自身が担当していたのですが、まずは受講する事が決まったら、学生を呼び面接をします。そして、実際にこの受講者を選抜する面接の段階でも、これ以降プログラム受講することが決まったら、担当の教員と共に二人三脚でやっていくので、呼び出したり声をかけたりしたときに、2 か月に 1 回の面接を受けてもらうことを条件とすることを最初に告げます。そして早速、受講がきまったら面接します。モチベーションを確認します。最初は、決まったということで意欲が高いので、高すぎることを含めて、ほどほどになるように、ある意味、先の見通しをもたせて大変な状況になるので、そのモチベーションを維持して欲しいということを伝えます。その上で、取得までの計画表を作成させます。初めは、かなり頑張った計画表を出してくるので、何度も修正させます。それを何度も繰り返します。

そして、その中でレポートの書き方も指導をします。引用文献の探し方、あるいは、書き方、読み込み方、それらを全部指導していきます。そして、大学の授業との兼ね合い、そして卒論との兼ね合いもサポートしていきます。

例えば指導教官によっては卒論と教職課程は別だという先生もいらっしゃいます。卒論は卒論でやってもらわなければいけないから教職課程をとっているからと言って特別ではないという先生も正直いらっしゃいます。ですから、学生がそこでくじけないようにするとか、先生とのやりとりの中で学生と先生の関係がうまくいくよう、こちらで間に入って、学生との橋渡しをすることも含めて、学生にもそれを伝えるということを面接の段階でおこなっています。

そして卒論についても出来る限り「教育学」ないし、「自分自身の進みたい方向と近いもの」をやりなさいということを 2 年生の後期で指導を始めます。本学は、3 年生からゼミを選びますので、そういうことを考えてゼミを考えなさいという指導もしています。

そして、1 週間ないし、1 ケ月のスケジュール確認というのをします。その上でそれ以降随時面接があるので確認をしていきましょうということを言います。そして、報告・連絡・相談のやり取りを必ずしましょうということをここで確認し、連絡先をこのタイミングで確保します。そうでないと、教育学部とかゼミの学生ではありませんので、このタイミングを逃すと連絡が急にとれなくなるということになりますので確認します。

②ゼミの指導教官への理解とお願い、学生との橋渡し

学生がとったゼミの指導教官の所に個別に挨拶に行っています。つまり、プラスアルファで学生が小学校の免許を取得するということで、非常に大変な時間を必要とするということと、ねぎらってほしいことをお願いするということです。やはり、理解のある先生と残念ながらゼミの活動や卒論をやってもらうのが当たり前で、不平等な扱いはできない、特別な扱いはできないという先生がいらっしゃいます。こちらは、ある意味そのような先生の情報をもったうえで学生にアドバイスができるので、挨拶にいくことは意味のあることだと思います。

③計画的に勉強が進んでいるかのチェック

授業時、学内で会ったとき、連絡が不通だった時にメールを入れる等

実際どういう時にするかというと、実際私が担当している授業内で個別に呼んで 5 分 10 分声をかけるとか、学内で会った時にも声をかける、励ますとか、あるいは、連絡が不通の時には、「元気ですか？」あるいは、「会える時間ありますか？」などのメールをいれて連絡をとるようにしています。

あとは、教職課程の教員等、委員会で情報を提供させていただきますので、とっている授業の時には、その学生に対して声をかけてほしいだとか、その学生と連絡がとれていないのでもし連絡がとれるようであれば、連絡するようにお願いするというかたちをとっています。その上で、面接の中で勉強の内容について、どこまで進んでいますか？とかレポートの進行度や実際スクーリングへ行った時はどうでしたか？とかの確認をとるようにしています。

④勉強場所としてのゼミ室の利用の保障

学生によっては、ゼミ室で勉強ができないとか、あるいは実際に教材具が無いということもありますので、わたくし自身のゼミ室を使ってよいということにしています。そういう時は、なるべく私も声をかけるようにして、どこまで進んでいるのかとか、レポートを書いているときには赤をいれるとか、細目にチェックするようにしています。

⑤レポート指導

かなりレポート指導は丁寧にしています。学生の方が心配不安ということがあるようで、学生がレポート提出の前に見せに来ることが多いです。やはり、そこで持って来ない学生が、途中でリタイヤします。そのような学生は、声をかけても「大丈夫です。大丈夫です」と言ってつながりが切れて（リタイヤして）いくことが実状です。

⑥２ヵ月に１回の面接

⑦目標をもたせるべきおしゃべり（ストレス解消をかねて）

２ヵ月に１回の面接をすることで、目標を持たせるべきおしゃべりをストレス解消もかねてやっています。教職課程の学生の中でも一人単位が多く取らなければいけないとか、あるいは生活の中でやっていくバランスが保てないというところがあるようなので、こういうことも含めて面

接の中ではやっていくようにしています。

⑧教職課程教職員のサポート体制

私自身も教職課程以外の学科のゼミ生も担当していますので、たっぷりと時間をとって指導することができないということがあります。教職課程の教職員にサポートをお願いしています。本学は特に事務職員が非常に協力的です。例えば玉川大学さんの書類を出す関係で事務職員さんと話をする場合も、事務職員さんが「頑張ってるか？」とか「頑張っている様子を聞いてるよ」というような声掛けを必ず学生にしてもらうことをお願いしていて、とてもそれを心よくやっていただいています。学生の近況報告を互いに連絡し合っているところもあります。ですから、授業の中で取りこぼされているところが出てきているということになると、やはり頑張りすぎているということになりますので、すぐに面接で計画を修正させるということをやっています。

あとは、レポート課題の添削ということで、私が間に合わないときは、他の先生が助けてくださるという環境が整っていました。

そして、小学校の教育実習先の保障ということで、これについては、特任教授の先生が直ぐに教育委員会に動いてくださって、そして、特に広い気持ちで受け入れてくださる校長先生をセレクトしてくださって、すぐにみなさんが動いてくださいました専任担当は私一人なのですが、体制としては先生方にご協力をいただくことで、非常に安心してできる体制だったと思います。学生もよく言うのですが、先生方が繋がっていて、どの先生も自分の情報を知っているから裏で何もできないということで下手なことはできないと言ってくれていました。うらをかえせば、どの先生も目をかけてくれるということが学生に伝わっているのだなと感じています。

＜課題＞

課題だと思ったのは、特に指導教官つまりゼミの先生のご理解が無い時の学生の支援です。どうしても後半になってくると学生によっては、小学校の教員になると言っていたある学生のゼミの担当の先生が「卒論に力が入ってなくて、卒論の評価ができない」と言う先生がいました。学生本人にとってみると、卒論は大事だと自分でもわかっているけれども、在学中に何としてでも単位を取りたいと思うと、どうしてもどこかで優先順位をつけなければいけない中では、卒論をパーフェクトにするという指導教官の願いに叶ったというような対応はできない。ゼミ合宿もスクーリングの関係で欠席しなければならない、ゼミの時間もなかなか参加できないということで非常に厳しい評価をもらっている。学生も言っているし、その学生の友達が見るに見かねて非常に厳しい評価および対応をゼミの先生からもらっていると伝えてくる。そういったところで学生とゼミの先生の関係でというところで、学生生活に対するモチベーションがちょっと低くなったところがあったので、今後の課題というところは学生のモチベーションの域というのは小学校プログラムだけではなくて、全般を通してモチベーションをバランスよく維持させていってあげるということが非常に大事だと思っています。卒論の手を抜くということは本末転倒になりますので、本学の課題というところでいいますと、こういったプログラムを大学として理解していただ

くということが一つ大きな課題かと思います。

それからもう一つは、本学の学生自体の学力と文章力ということも大きい問題です。やはりレポート指導というところで本当にお恥ずかしい「てにをは」まで丁寧に指導しなければいけないということがあります。最初にレポートを指導した時には、私が書いたレポートになってしまったのではないかと正直心配してしまうような内容だったのです。ですので、文章力という所が大きい課題があったということで、反省を踏まえて、実は今年度の１年生から「文章とレポート作法」という一般の授業だったところを教職の学生の必修登録にしてもらって、一般の学生と分けて教職の学生だけが受ける授業にしてもらって、教職担当の先生が授業をして、それ自体が通過審査になったので、それは一つ大きい成果になっているかと思っています。なので、学力と文章力というところは、どのようにしていったらよいかという検討課題になっています。

それから受講させる基準で、これまでは、意欲、関心、伸び白幅とありましたが、やはりそれでも落ちていく学生がいるということを考えると基準を設けなければいけないかと思っています。ただし基準を設けると本学、学力が厳しいので、GPA ではなくてどこでみていくのかということも含めてみていくことが大切だと考えており、これも検討課題になっています。

それから、やはりこういったプログラムをやるうえでは、学生にまかせっきりというのは大学として無責任だと思っています。ですので、そういう意味でいうと、教員自身がどういう指導体制でやっていくかということで指導時間の確保ということが重要になってくるかと思います。私、自身のことを言いますと、教職課程以外に学科の担当になっていて、ゼミ生を１６名もっているという限界があります。

大学として、来年以降教職課程の専任でやっていくことを検討するというかたちになっているので、これも一つ課題としては繋がったということで大学が受け入れてくださった、というところがあると思います。指導時間をきちんと確保するということは大学として本当に大事なことではないのかと思っています。

そして、本学は、最初に掲げさせていただいた、「３０歳までに教員になろう」ということでいうと、実は、この２年生は情報の免許しかないということもあるのですが、教職大学院がないかわりに「専修免許状をとろう」ということで本当に教員になりたい人は大学院に行きなさいという指導を始めています。

そうなってくると免許を取得するということになると、中高の免許をとりながら、小学校の力も考えていくということでいうと、大学院までつなげて行きながら幅広く勉強をしていくということで、一つ何か今後本学で教育していくということでのプログラムができてくるのではないかと、これからどんどん課題になっていくのではないかと思っています。

5　免許取得学生に対するインタビュー調査

実施日：平成 27 年 2 月 14 日　1 人 30 分（電話インタビュー）
実施対象者：　小学校教員養成特別プログラム修了者
A：横浜市小学校非常勤講師
（在学中に小学校免許を取得）
B：成田市少人数推進教員　（平成 27 年 4 月より千葉県小学校採用）
（卒業後に単位をとって小学校免許を取得）

（1） プログラム受講のきっかけ

A　教師になりたい、中高以外に小学校もとれるため選択肢が広がる

B　中高教員希望、小学校も気になって勉強したいという軽い気持ち

⇒共通して言えることはどちらも最初から小学校に教員を目指してないということ。

（2） 本学の単位取得との兼ね合い

①どのようなスケジュールを組んで勉強したか

A　2 年生までに単位を 80 単位取得し、3・4 年生は小学校免許取得の勉強にあてた計画を立てる　例)1 ヵ月に 2 枚のレポート→試験

通学中にテキストを読む

時間的ロスがないようにレポート提出後は、次の科目の学習を進めた

B　2 年生までに単位を 80 単位以上取得し、ゼミが経済の先生だったが許可を得て、 原田先生が担当になって卒論のテーマを「高校の教員の道徳の授業の意識～道徳の意識の実態調査」ということをおこなって教育学に関連させた。

土日に集中して勉強をし、授業に影響しないようにした

授業内で理解できるよう集中した

自分の時間（たとえば、バイト、遊び、サッカーサークル）をけずった

レポートを送っている間に、他の教科を行う

⇒本学では 2 年生の段階になった時に玉川での小学校のプログラムがあるということを紹介しているので、この学生たちは興味を持ち、「なるべく単位をたくさんとっておこう」という意識をもったといことで 2 人とも 3 年生、4 年生の時に勉強ができる体制をつくっていた。取得できなかった学生に関しては、やはり単位を 80 単位もとっていなかった。ということで、この差は大きいこと。

2 人とも間を開けずにレポートに取り組んだというところが共通している。

②勉強における苦労

A　科目によるが、レポート課題ができても試験範囲が広すぎて試験勉強が追いつかない。レポート課題が終わってから、試験までの期間が開いてしまって、試験までに他の科目課題をやると試験内容の学習が頭から抜けてしまうことがあり試験を受けることに非常

に緊張感があった。

B　受講者が少ないため、レポートや大変さを共有するといった話ができにくかった。スクーリングで仲良くなる人はいても友人はできなかった。つまり愚痴を言い合うという大変さを共有するという仲間がいなかったことが辛かった。

③スクーリングとレポートについて

A　スクーリングに行かないと在学中に取得できなかった。金銭が影響し、むしろスクーリングで取得した方が試験は負担が少なかった。

3年夏2科目、冬2科目、土日スクーリング1科目、春1科目、4年夏1科目

試験は全て1回で合格した。（うち一回は名古屋にも行った。）

通過で非常に苦労したレポートが「教育課程編成論」：担当者が 2 名代わり、3 名の指摘がそれぞれ異なりレポート作成が非常に困難で、「なにをやっても自分はダメだ」と途中で何度も投げ出したくなった

B　3年夏2科目　春1科目；4年土日スクーリング2科目、春1科目

「教育課程編成論」：担当者が途中で1名代わり指摘が異なったのでレポート作成にてこずった。そのおかげでわからないことを深めることができ、身になった

⇒「教育課程編成論」は、A.B 他に現在非常勤を行っているあと1科目で取得の学生も難しいと言っている。共通して3名が言っていることは、戻ってきたレポートを書いている最中に担当者が変わっていて再提出すると指摘されていることがかわってしまい何をどう書いてよいか分からなかった。こちらが指導の様子を全く認識できなかったので玉川大学との連携が大事だったのではないかと思う。

(3) プログラムを通して何を得たか

A最後までやり通すこと、達成感、仕事をやるうえでの自信になっている。

仕事でも文章を書くことが非常に多いのでレポートの書き方が身について非常に活かされている。

B このプログラムを通して教員としてやっていこうという強い信念ができ、特に3年生の終わりにかけて中高の教員ではなく小学校の教員になろうという強い意志がもてた。小学校の教員になるためにもその先に中高にどのように成長を生徒がしていくかという視点から教育実習ができ、学びが全部つながっていたということが今だからこそわかる。そういう小学校の教員をやりたいということで自分の勉強不足を痛感して勉強への意欲が高まった。そのうえで、計画性の力がついた。計画的にやらないと身にならないということで、計画定期に何かを成し遂げる。いろいろなものがある中で、バランスよく優先順位をつけてやるというこの計画性が、今職業で一番生きている。

この二人は専科で本来、本人が学ぶべき中高の免許、獲得して欲しい専門性以上に広くあったのではないかとインタビューから感じた。この二人がプログラムをやることを通して、自分自身の教員としての向き不向きも見えたといっている。中高の免許もとるけれども、向き不向きを通してやっぱり小学校の教員をやっていこうということが自覚できたことも、このプログラムをやったことの意義だったと言っている。

いま、職業の中で、発達段階ということが見えるようになった。非常勤をやっている中で、この先にこういう成長をするために今ここで何ができるべきか、ということが支援するのに活きているということです。これは、中高の免許を取得していないとわからないことなので、キーワードとしては「発達課題」「発達支援」ということがみえてくると思いました。

そして、B の学生がいま職場で「あなたは小中の免許を持っているのにあなたは何をやっているの？」と言われて、頭が真っ白になった。専門性をもっている先生からみると、B の学生には専門性がないように見えるかもしれないけど、実は、これ（いろいろな免許）を持っているからこそ自分の専門性ではないかと、持っていることによって得意とするところが浮かびあがってくる、だからいろいろな免許を持っているいろいろな勉強してきたから、今ここで小学校の教員をやりたいということが見えてきているから、活かされているところがあるのではないかと、今なら言えるのではないかとインタビューを通して考え直すことができたと言ってくれました。

以上のことを踏まえて、大学の教育の在り方として、教職課程の教員自身がどのような支援をしていくかということを教職の中や大学のなかで共有し理解していくことが一つ大事な視点になるのではないかということと、それから、卒業後に取得したいという学生に対しての教育ということが凄く大事だと思います。それから実際に落ちていく学生はいると思うがチャンスを与えるということは非常に大事で、挫折につながってしまうかもしれないが、そこは、フォローしていくことも踏まえたら、学生に対して向き不向きを検討させるという意味でとか、専門性を見つめ直す意味でとか、そういうことも含めると、チャンスということで本学の学生にとって、このプログラムは非常に意味のあるものだと思っています。

最後に、本学の学生を支えるという意味では、連携先の大学様とも全く情報を交換がゼロではなくて、連携をしていくといくことを通して、本学の教職の教員も勉強させていただきながら、学生を支援していくという体制を持っていく必要があったかと思います。今の段階では学生が一人（プログラム受講の）いますので、実は中高社会と情報と公民と商業と非常に（免許を）取りすぎているのですが小学校も一発で取得するのだと言っていますが、その学生については、「大学院へ行って勉強しなさい」と指導しているところです。そういった関連から、これから何ができるかと改めて今日のことを踏まえて、もう一度検討していきたいと思っています。以上とりとめのないことですが、発表を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

高橋 : 先生方ありがとうございました。お話しをいただいて本大学も反省すべき点があるなと反省したわけですが、お二人の発表を聞いて、大変熱心にご指導頂いていることがわかり、本学も

参考にさせて頂きたい部分が多くあると思いました。ありがとうございました。

【質疑応答】
高橋：それでは、質疑応答の時間とさせていただきます。
ご質問のある方は挙手をお願い致します。
みなさんから質問がないようでしたら､お二人に私から一つずつ質問させていただければと思います。滝沢先生からで、TA を単位化されているということでしたが、本学では、授業の兼ね合いが難しく、（ボランティアへ）行ける人は行きなさいというような指導が現状です。大正大学ではどのように授業との調整をして、TA を単位化とされているのでしょうか。

滝沢：単位化する前から、大学の隣の中学校の数学の時間に TA として入っていたのです。学校の方から時間割をいただいて、例えば、火曜日の２時間目には２年生の１組と２組の合同の授業（2 クラスを習熟度別に 3 クラスに再編）があるので来てください、というような要請があります。その時間割に合わせて大学の授業の空き時間などに学生を週 1 回行かせていて、そこから TA が始まったのです。中学校の場合はいいのですが、小学校の方になると、朝登校の所から一緒にやってほしいということが、小学校側にも私の方にもあったので、単位化をしてからは、小学校へ行きたいという学生が多かったので、学科の 1 年生向けの科目は水曜日には入れない、ということをやっています。ですから、近くの学校や母校などの TA をそこへ（水曜日）入れています。２年生以降になるとそれがなかなか難しいのですが、あと、うちの学科以外の学生で２年生から教職を取り始める学生がいるのですが、私が教職課程の授業の段階で言うわけですよ、2 年生の秋学期くらいから行きたいと、そうするとそのような学生と話す中で、なんとかこの日の午後空けられないかとか、午前中空かないのか、という話をします。なかなか難しい学生には、隣の中学校の数学に入るとか、他の中学校の放課後の個別指導に入るとか、そういった調整をしているわけです。ということで、なかなか一般の単位を取ろうとする学生には少し難しいことですので、ですから 1 年生の秋学期になると、出向く学生の人数が減ってしまって、春学期に 70 何人入学して来て、40 人から多い時は 50 人になるのですが、秋学期以降は半分くらいになってしまいます。

高橋：わかりました。ありがとうございました。先生のところのようにボランティア先がお隣にないものなので、大学の授業を午前あるいは午後を全部開けるようにしないと、なかなか週に一回ボランティアすることはできないですよね。そのへんは教学が授業の時間割を組んでいるので、相談してやっていかなければいけないところだと思います。今回その意見を伺いましたのでそれを含めて考えていきたいと思っております。それでは、原田先生のところでは、授業に出やすくされていることがよくよく理解することができました。原田先生のような方が大学に何人かいれば、大変充実した教員養成ができるのではないかと思いました。お伺いしたいのは、学生が様々なことに主体的に行動するということは、大変重要なことだと思いますが、学生の自主性を植え

付けるというところでは、何か具体的なことをされていますでしょうか。

原田：そうですね。「褒めて伸ばす」ということをやるようにしています。計画を立てる時も本人が計画してきたもので、やはりできることは尊重するということで、やらせるということで実感させる。だけどもやり過ぎるとか頑張り過ぎるとか、できるのにそこまでやらないという子、予防策を張る子がいるので、そういう子には、どうなのかと投げかけをして考えさせるという、そのために面接を行っているというかたちですね。

高橋：ありがとうございました。原田先生のところでは 2 ヵ月に一回面接をやられているということですが、学生はやってきますか。

原田：はい、2 ヵ月に 1 回以上来ます。学生の方が勝手に、、、。勝手にというか変な言い方ですが、最初に 2 、3 回呼んで面接をして、怒られるのではないと学生がわかると来るようになります。例えば、ある学生によると、一人で悶々としていて、どっかで吐きたいけれど誰かに知られるのは嫌だと思っている時に、私のところで話す分には、漏れないし聞いてくれると、あるいは、勉強する中で、自分で目標をたてても先が見えなくて不安であるとかという時に、継続して指導してきているので私のところに頼れば何とかなるかとか、そのような関係性があると、2 ヵ月に 1 回と設定しているよりも早く、本人の方から事前にアポイントを取ってくることがあるので、学生によってはもっと間が狭くなります。

高橋：原田先生は先ほど、各学年に担当があるとおっしゃっていましたが、先生は 3 年生の担当と伺ったのですが、担当の学年以外の面接も先生が対応されるのでしょうか？

原田：1 年生、2 年生、3 年生の参観実習の引率は全部、私がおこなうのです。なので、わたくし自身の授業はとっていなくても、ガイダンスから始まって主要な会は全部私が出ますので、私の顔は全学生が分かるみたいです。さらに通過審査のガイダンスや試験は私がやるので、私の方でも、ほぼ 2 年生の段階で、学生の名前と顔が全員一致します。

高橋：先生のゼミ生の授業というのは、教職とは関係ないですよね。

原田：まったく関係ないです。

高橋：ゼミの中に教職の学生は何人いるのですか？

原田：教職の学生は、いま、6 名います。

高橋：なるほど、では、１０名は全く教職とは関係のない学生たちなのですね。

原田：はい、全く関係なくて、心理学をやっています。

高橋：滝沢先生のゼミの学生は、教職とは関係ないのですか？それともほぼ教職ですか？

滝沢：ほぼ教職です。ただ、3 年生になった時に、辞めた者もいますし、今度 4 年生になる者は 9 名中 6 名が教職です。

原田：おそらく本校は教職の人数が少ないので、先ほど言ったように学年が上がっていくたびに人数が 20 名くらい減っていきます。1 年生前期は 50 名くらいいるのですが、すでにこの後期になって人数がすこっと減っているのです。

高橋：100 名くらいですか？

原田：そうですね。100 名くらいですね。

高橋：大変ですよね。100 名だと。

原田：情報大学は、擦れた子がいなくて、かわいいのです。人懐っこい子がすごく多くて、高校までの間に目をかけてもらった子が少ない子が多いのです。どちらかというと、端っことか隅っことか外れ地にいた子が多かったので、ちょっと、声をかけると、ピタッと引っ付いてくるのです。森山先生もわかってくださると思うのですが、その様な学生さんが多いので、授業を教えてなくても来るという感じがあります。ゼミ室はあるのですが教職の子たちに広げているので、人が入ったり出たりしてゼミを越えてみんなが勉強しあっているのです。そこはとても良いことだと思うのですが、私の身体が持たないということが問題です。レポート指導というのは難しいですよね。

高橋：確かにそうですね。通信のシステムを使うところと、レポート課題だけでの質の保証という部分で少し課題があるのではないかと言われています。いずれにしても、レポートがすごく勉強になったという所があるかと思いますし、文章を書くということが非常に重要だと言われている中で、自分で勉強してレポートを書くということは、ただ授業に出て試験を受けて単位をもらうよりも、よほど自主的に勉強し、実力もつくのではないかということも、本学で少し意見として出ていることもあります。今日、お二人の先生からお話をもらって、通信も意味のあるものでもあると理解できました。さらに少しお伺いしたいことがあります。お二人の先生方がとても卒業生の情報をよく御存知だと思いました。本学は、卒業させてしまうと、あまり連絡をとらなく

てなってしまうということもあります。卒業生との連絡体制というのは、何か具体的に、卒業後の連絡先を調整する方法とか、大学から定期的に連絡をとるとか、そういった制度はございますか？

滝沢：制度的にはないです。卒業をしてから教職に就いている、講師や非常勤というかたちで頑張っている子達は、個人的に自然にFacebookやLINEでつながっていて情報交換をしています。

原田：情報大学の場合は、卒業生が一斉に情報管理されているのです。その中でも教職の学生は、事務によりピックアップされて就職先まで全部一覧にしているので、何かあるとその学生に連絡できるという関係になっています。就職が決まったという非常勤の学生は、必ず連絡が来ますね。あとは、卒業生が近隣に住んでいるので、学校へよく顔を出してくれるので、誰がどうのこうのと話してくれるので、それをすぐに記録をとって保存しますので、情報が管理されるということになります。あとは、千葉の非常勤などは、大学から学生に紹介しますので、委員会とつながっていまして、評判も含めて採用試験などの合否の情報は、本人が言わなくても全部流れてきます。

高橋：なるほど、わかりました。お時間もきましたので森山先生の方から最後にお話しをいただきたいと思います。

森山：有意義なお話をいただき本当にありがとうございました。私の方から今日のお話をいただきまして、これから我々が取り組まなければいけない課題も明確になりました。5点ほど感想とこれから取り組むべき課題点についてお話しをまとめさせていただきたいと思います。

一つは、履修のプログラムをやはり再考しなければならないということです。当然、主免の中高の免許が動いていて、その中に小の免許が入るわけです。これは主免の中高の単位と小の単位の合わせではありません。例えば、大正大学の場合は、2年生から小が入るとか、玉川もそうですね。原田先生の東京情報大学は 3 年生から玉川のプログラムを採用しておりますので、このあたりの所が物理的な問題がありますので再考する必要があると思いました。今日、大正大学のプランを伺いまして、やはり、3年間かけた方が良いという面もあるかと思います。でも、まだ明確にされていないという意味でのものを下におろしますと、主免である中高の免許の核としたものの中で位置づけをするという意味では、ここのあたりはどうなのだろうと、ただ一年間たっているからいいだろうと、あるいは先生方からご指摘いただいたように、1年生の成績で評価することはなかなか難しいです。このことについては、原田先生からものすごく明確な東京情報大学の通過審査のプランをご提示いただきました。これだけしっかりしたものをおこなっている大学は少ないのではないかと思います。そういう意味では、私どももやはり通過審査というものを明確にすべきだと思います。私が日頃から思っているのですが、最初食べる時には、まず食べさせろと、だけどダメなものはどんどん辞めてもらうと、やはりその様な仕組みを作らないと、誰でも食べさせて誰でもいいよというわけにはいかない、だけどやっぱり食べさせないと、良いも

悪いもわからない、おいしいとかまずいとか俺の口には合わないとか、その辺の兼ね合いをもう一度この履修プログラムの中での工夫で、しっかり考えていかなければいけないということを、私としては今後の課題として明確になりました。

それから二つ目は、お二人の先生からもございました連携の問題です。大学間の連携を明確にしないといけない。例えば、玉川大学と東京情報大学、あるいは大正大学と明星大学というような 2 大学間の連携というものがしっかりと確立しないといけないということを理解することができました。他大学間連携が指導体制との関係というところに非常に出てくるというわけです。そこでの指導体制の中から、大学間がどうあるべきか、ということを今後、確実に我々としては、明確にしていかなければいけないと思いました。

それから三つ目は、免許取得に関する単位数についてのことです。単位が非常に多いわけですから、その中で中高免を取得して、20 数単位をまた加えてとるということと、当然それぞれの学部での学びがあるわけです。それから今日もお話がありました通り、ゼミとかあるいは部活もあるでしょう。いろいろな大学自体の学びというものが、大学生が成長する非常に大きな過程になっているわけです。そう考えますと、なかなか大学 4 年間で完結することは非常に難しい面もあるだろうと思います。併有の校種が増えて、小中高とか中高の複数の教科の免許を取得する場合は、やはり、ある程度期間を延ばすということです。今日もお話しに出ていましたが大学院へ進むなどの、4 プラスαの所をしっかり考えて、その中でいわゆる併有の学部にもこれから計画を立てていくことも必要なのかということを本日しっかりと認識をさせていただきました。まさに「質の保証」というところについては、やはり大学にとって、今後の教員養成制度の中で一つの近い存在として我々としては対応しなければいけないということを理解した次第でございます。

それから四つ目は、いわゆる小と中高の校種を越えてという所で、発達という観点が非常に重要だと再認識させていただきました。やはり、近隣の校種を知るということが、まさに教員としての資質能力の向上に相当大きな要素を持っていることを本日再認識させていただいたような気がします。これは、参観実習や何かの方法で、東京情報大学さんも大正大学さんも小学校、中学校へ行けるシステムをきちんとプログラムの中で作って具体化されています。発達と言った観点からも非常に重要な視点をいただいたと思っております。

最後になりましたが五つ目です。もしかしたら言い過ぎかもしれませんが、併有に関しては、中高免に対して、少なくとも卒業単位に認めるということが前提になると思います。それぞれの大学が教職課程について、卒業単位に組み込まないと併有の問題が解決していかないです。今のままではとにかく学生は単位ばかり増えてしまいます。教職課程で履修した単位をそれぞれの学部学科が卒業単位に認めるということを前提にしないと、本当の意味でのダブル免とか、あるいは併有の免許についての質の問題が相当出てくるだろうという感じがします。やはり現状は、4 年間で一種をとって卒業して教員になるのがほとんどの学生です。まだまだ修士化と言えども、ほとんどの学生が 4 年生を卒業して、それぞれの大学の学部学科で教職課程の単位を卒業単位に認めるというような形にしない限りにおいては、本当の意味での組織の中での修士化はできな

いのではないか、ということを少し厳しい言葉かもしれませんが、わたくし自身は、そのように感じたところがありますので付け加えさせていただきました。

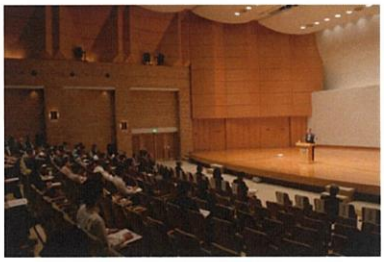
本当に先生方、長時間ありがとうございました。そして、今日いただきました貴重なご意見は、今後しっかりと報告書の方で示させていただいて、今後もまた小学校、中高免のいわゆる併有免許で通信の中でも少しでも役立てるようにしていければと思います。それでは、これで終わりにします。ありがとうございました。

資　料

玉川学園創立 85 周年記念「玉川大学教員養成フォーラム」が開催されました

2014.12.18

リーダーに求められる、個性や才能を見抜く力、まとめあげる力



10 月 25 日（土）、学校法人玉川学園創立 85 周年を記念し、昨年に引き続いて「玉川大学　教員養成フォーラム」が開催されました。
「これからの教員に求められる資質能力と今後の教員養成」をテーマに掲げ、本学卒業生である演出家の宮本亜門氏の記念講演をはじめ、各界で活躍されるシンポジストをお迎えしたシンポジウムを行いました。その様子をご紹介します。

当日はおだやかな秋空のもと、会場である玉川学園講堂は遠方から他校の教職員や自治体教育委員会の方々、現役の教育学部生など大勢の参加者で集まりました。フォーラムの開会を告げるのは、本学芸術学部の学生による玉川太鼓の演奏です。赤いたすきをきりりと締めた男子学生 15 名の力強い演奏に盛大な拍手が送られました。

次に小原芳明学長の開会挨拶へと続きます。「アメリカをはじめとする世界各国で新しい時代に備えた教育の推進、その重要な役割を担う教員のあり方が検討されています。私は中央教育審議会の一員として教員養成の部会を担当しており、21 世紀にふさわしい教育とそれを担う教員の養成を課題に掲げて、改革の推進に取り組んでおります。本日は、行政、教育現場、演劇でご活躍の方々をお招きし、それぞれのお立場から忌憚ないご意見をうかがい、皆さまとともに教育を担う教員養成について考えていきたいと思います」。小原学長はこのように結び、来場者へのメッセージとしました。続いて、演出家・宮本亜門氏の記念講演です。

宮本亜門氏

宮本氏は玉川学園高等部から玉川大学文学部芸術学科演劇専攻科へ進学された、「玉川っ子」です。ご存知のように、ミュージカル、ストレートプレイ、オペラ、歌舞伎などジャンルを越えた演出家として、国内外で幅広い作品を手がけています。講演のテーマは「違うから面白い、違わないから素晴らしい」。「玉川へ来るたびに礼拝堂などの景色、遅刻しそうな時の急な坂道など、いろいろなことを思い出し、ほっとします」と、テレビ番組で知られるにこやかな笑顔とユーモアあふれる語り口そのままに講演が始まりました。

宮本氏は東京の新橋演舞場前の喫茶店を営む両親の間に生まれ、元松竹歌劇団ダンサーだった母の影響で幼い頃から歌舞伎座に通い、演劇や音楽、仏像鑑賞など幅広い分野で造詣を深めるきっかけがありました。一方で幼稚園時代に日本舞踊を習い、一般的な男児と異なったことをひどくからかわれて、その後の友人関係が疎遠になる経験をし、ついに高校 1 年の時には窓もない自室に閉じこもったそうです。10 枚のレコードを大音量で繰り返し繰り返し聴き、聴くごとに広がる音楽の世界のきらめきに魅了された宮本氏にお母様は、「学校へ行かなくてもよいが大学病院精神科への通院」を勧めたのです。1 年間の引きこもりの日々に「誰も自分の話を聞いてくれない」と悩み、「どうしたらいいか、完全に分からなくなっていた」宮本氏の話を、精神科の担当医は一切否定をせず受け入れてくれました。これが人生の転機

となり、引きこもり生活で一番きらめいていた音楽の世界から刺激されたイメージを伝えたいと、映画監督や舞台演出家が目標になったのです。その後玉川学園高等部に復学し、明るく迎えた周囲に「自分で自分を責めていた」ことに気づかされたと言います。高等部では演劇部に入り、高等部の部長であった岡田陽先生にも勇気づけられ、ミュージカル「ゴッドスペル」を視聴覚室で上演。当時、研究などで成果を上げた生徒に贈る小原賞を受賞し、「僕は生きていてよかったんだ」と回想します。
演出家として心がけているのは、「オーディションは最初から才能だけに注目して選ぶのではありません。人はどう変わっていけるか、という部分を私が見抜けるか見抜けないかの勝負なんです」。オーディションでの宮本氏はあえて大きな声でふざけたり、アドバイスしながらオーディション参加者の心を解放し、その人が変わる瞬間を見極めます。また一つの舞台を作り上げるリーダーとしては、演出家になったばかりの頃の失敗や海外制作での考え方の違いなど多くの経験から、スタッフの意見に耳を傾け、みんなで話し合いながら作品を作ることの大切さを学んだと言います。
そして、いろいろな才能を育てる学校や教員養成について宮本さんは次のようにまとめました。「普通だったら考えない視点や考え方を、私は『普通なら変わっているかもしれないことが、実は面白く、新たな可能性を秘めている』と舞台演出でも積極的に取り上げています。新たな考え、新たな発想、新たな化学反応が世界で起こっている今、日本からいろいろな才能が学校教育の中で次々と育ってほしいと、心から願っています」。宮本氏の現在のご活躍の土台にあるさまざまな出来事や想いに触れたお話に、会場の参加者から熱い拍手が寄せられました。

今、必要な教育改革とは何か――社会的背景、課題から考える

遠藤利明氏

次は衆議院議員・自民党教育再生実行本部本部長の遠藤利明氏の特別講演です。テーマは「今後の教員養成の方向性」。遠藤氏はご両親をはじめ周囲に教師を職業にする方が多かったことから、政治活動のテーマとして「教育」を取り上げてこられ、2006年には文部科学副大臣を務められています。教職大学院の開設に尽力した際の裏話を披露され、また現在の教育再生実行本部の指揮役として、現在検討あるいは実践に向けた調整の段階にある「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」「平成の学制大改革部会」「大学・入試の抜本改革部会」「新人材確保法の制定部会」の提言取り組みの数々についてエピソードを交えてお話くださいました。まとめに小学校5年生の担任教師の思い出にふれ、「先生は私の顔を見て、『なんかいつもと違う。病院へ行ってらっしゃい』と言うのです。まったく自覚症状がなかったのですが、病院で診てもらったら急性腎炎で2か月入院。『先生ってすごいなぁ～』と改めて思いましたね。子供の顔を見て変化に気づくような、そんな先生になっていただきたいし、われわれもそんな先生を養成するシステムを作っていきたい。」と、述べられました。

小松親次郎氏

次に文部科学省初等中等教育局長の小松親次郎氏による基調講演です。「初等中等教育を担う教員の資質能力と養成大学への期待」として、「これからの学校教育に求められる教員の在り方について」をテーマに、取り組みの状況と今後の展開について述べられました。教育改革が求められる背景には、制度的背景として、教育基本法や学校教育法の改正による心の豊かさが重視される時代にふさわしい教育への転換、社会的背景として、少子高齢化により生産年齢人口が減少していくという問題や、日本の子供の学力は世界トップクラスにある一方で、学習への動機付けや実社会との関連、自己肯定感などの面で様々な課題が見られること、更に、子供の貧困率が

年々悪化し、世界で低くない方であることなどの問題が生じてきていると述べました。

今年７月に教育実行再生会議が報告した第五次提言「今後の学制等の在り方について」では、学制改革とともに、教員の資質能力に関係の深い教員免許制度改革や「チーム学校」という考え方が提唱され、小松氏は「教育の質の中心にあるのは学校の先生であり、注力していただくのは『授業』です」と訴え、その実現には、これまで養成・採用・研修の各段階の接続を重視して見直し、再構築することにより、教職生活全体を通じた職能成長を実現する環境作りを推進してきたことを踏まえながら、教員養成大学の大学毎の強みを生かした機能強化を図り、教職大学院についても全国規模の整備を促進していくことなどが必要であると述べました。まとめに「これからの学校は、開かれた組織を目指す必要があり、校務についても『分担と連携』という意識を深めることが求められます。先生の分担の第一は『授業』であり、学校の管理職や行政の『分担』はその環境整備です。その上で、先生方には学校の内外にわたる『連携』を適切に進めていって頂くことが期待されます。」と結びました。

「教師に求められる力量と養成大学への期待」を語るシンポジスト各氏

フォーラムの最後をしめくくるのは、シンポジウム「教師に求められる力量と養成大学への期待」です。田子健氏（東京薬科大学教授）をコーディネーターに、貝ノ瀬滋氏（三鷹市教育委員長・教育再生実行会議委員）、中島美恵氏（町田市立南大谷小学校主幹教諭）、藤田朋子氏（女優）、そして玉川大学 森山賢一（玉川大学教師教育リサーチセンター長・玉川大学教職大学院教授・教育学部教授）のシンポジストを迎えました。

田子健氏

田子氏から、「先生とのよい思い出」を四氏に尋ねてスタートです。舞台やテレビドラマ等で活躍する藤田氏は、玉川学園高等部に入学し、活動した英語演劇部では顧問の先生が自由に活動させてくれた思い出のエピソードを語り、「生徒のことをきちんと理解しようと努力してくれたり、一つひとつのことを大切に思ってくれる先生は、やはり思い出に残る」と話しました。

貝ノ瀬滋氏

貝ノ瀬氏は北海道出身で、「団塊の世代で 60 人位の学級だったが、担任の先生はよく観察してくれた。とくに小学校 5，6 年の時の担任は、私が社会科の地図を使い、いろいろな国のことを自分なりに調べて知識を蓄えていたことに気づき、みんなの前で発表させてくれました。そのことで私は自信を持てるようになりました。いい先生、いいリーダーとは、まとめる力と子供の強みを引き出す力を持っていることだろう」と話します。また小学校教員免許取得のために玉川大学通信教育部で学び、「小原國芳先生がご健在で、労作教育の活動をはじめ、言葉だけでなく身をもって示してくれた」とし、新宿駅で通路に落ちている吸い殻を拾って所定の場所に捨てている先生を目撃し感動したエピソードを披露。「私は２人のすばらしい先生に恵まれました」と話しました。

中島美恵氏

中島氏は町田市出身で、小学校時代に玉川大学の学生が教育実習に来校したことにふれ、「とても親しく接してくれたことが、自分も教師になってみようかと意識したきっかけだった」と語り、「これから教育実習に行かれる方に、子供たちにとって心に残る存在であり、影響力があると考えて、教育について学んでいただきたい」と話しました。森山（玉川大学）は、教育学部で教鞭を取る立場から、新入学生に「心に残る教師の一言」を書き出してもらうと、“褒められた”“認められた”言葉と、生徒を“否定する暴言”の二つに分かれるとし、「教育の重要な担い手である教師が発する言葉は、児童・生徒に大きな影響を与えていることを実感しています」としました。

子供たちへの影響力の大きい教師とは、「『どうせ私なんか』と自尊感情を持てない子供たちも、心の底ではよりよく生きたいと願っている存在であり、心を通わして指導を重ねれば、必ず自覚や能力が目覚めると信じて仕事をしなければならない」（貝ノ瀬氏）、「一人ひとりの状況を見取り、声をかけていくコミュニケーション能力が全ての基本」（中島氏）、「人間的に真に慕われる、仰がれる人がなるべき」（藤田氏）と発言。

藤田朋子氏

また、藤田氏は「授業を難しく、解りづらくしているのは先生。先生自身が興味を持ち、解るように伝える能力のある人でなければならない」と強調し、会場から拍手が湧き起こりました。さらに「学校の先生も毎日一つの舞台をこなしている。アドリブもあれば、話がそれることもある。でも、１年、２年、３年と舞台の終演に向かってどんどん進まなければならない。日々、さまざまな問題や事件が起こる中で、それに対応してくれ、一緒に考えくれるのが学校だ」とし、「自分自身が小学生の頃はどうだったか、というイマジネーションを働かせる力が大切」と語り、会場はおおいに湧きました。

森山賢一氏

藤田氏の投げかけに対して、教員養成大学の新たな取り組みとして、森山（玉川大学）は「教育の技術は経験だけに基づくものではない」という、教育学者ヘルバルトの言葉を挙げ、理論をしっかりと学ぶことの重要性を訴えました。また、玉川大学の１年次の参加型実習を取り上げ、早い時期からの教育現場での実践の積み重ねとともに、理論と実践を繰り返す相互作用、適性判断の機会を兼ねていることを紹介しました。貝ノ瀬氏は「学び続ける教師、というキーワードは重要。子供にばかり学ぶことを要求するのではなく、教師自身も常に問い直すということが大事である」としました。中島氏は「私たちの仕事は子供たちの成長を目の当たりにできるすばらしい職業。この喜びを思い、自分をさらに磨き、高めていくことが大切」としました。森山（玉川大学）は「学び続ける教師であるためには、養成大学の役割を明確にする必要がある。免許更新講習会など、研究と研修の両立がポイントになるだろう」とまとめました。

最後に藤田氏から、「『尊敬』という定義が崩れてきている社会の中で、教育の役割は大きい。先生方、ぜひ頑張ってください、お願いします」と励ましの言葉をいただきました。

そして、玉川学園理事の高橋貞雄（文学部教授）より閉会の挨拶です。短い時間でしたが、学校の役割、教師養成の方向性など、さまざまな課題を投げかけた有意義なフォーラムの幕が閉じられました。

平成 26 年度
総合的な教師力向上のための調査研究事業　報告書

平成 27 年 3 月発行
編集・発行　　玉川大学　教師教育リサーチセンター
　　〒194-8610
　　東京都町田市玉川学園 6-1-1
　　ＴＥＬ：042-739-8219
　　ＦＡＸ：042-739-8857
印　　刷　　日新印刷株式会社